

# 山田城悲話

豊前市の櫛狩屋に山田山（茶白山）という小さな山がある。

今から四百年ほど昔の戦国時代、ここにお城があったんじゃ。

そのお城は山田大膳正輝家というお殿様が守っていたんじゃが、輝家にはそれはそれは美しい娘が

おつてのう。娘の名は『じょうら姫』。大きゆうなるにつれ

て、じょうら姫の美しさは増すばかり。村んもんも姫の美し

さがじまんじゃったそうな。

そのころ、輝家は豊臣秀吉の家来の黒田氏と戦っておつた。

ある日のこと、勢いを増してきた黒田勢が、ついにこの地に

せめこんできた。守りの兵はわずかであったが、懸命に戦い、

「陣所べら」や「一の渡」の戦いでは、黒田勢をさんざん苦

しめた。しかし、黒田勢は大軍でなあ、とうとうお城におし

よせて来た。

輝家は家来に言った。

「もはやこれまでじゃ。わしと奥は最後までこの身を城と共

にする覚悟じゃ。みなのは早うにげるがよい。」

家来の中にはくやしがり最後まで殿と共に戦いぬくとい



う者、泣く泣くにげる者、様々じゃった。かといえは「敵に家宝はわたさん。」とばかりに、金の茶がまや財宝を城内の古井戸に投げこむ者もいた。残る者もにげる者も心は複雑にゆれ動いておった。

そして輝家はじょうら姫にもこう言ったんじゃ。

「姫よそなたは何とかにげ延びてくれ。たとえ敵の手に落ちてても美しい姫のこと、命まではうばうまい。供の者たち、くれぐれもたのむぞ。」

「父上、姫もいつしよに残ります。」

じょうら姫は父に泣きすがつたが、必死になだめる供の者たちに連れられ、泣く泣くお城を後にしたんじゃった。

一行は必死に走り、もうここまでくれば「安心」というところまで来てお城をふり返ったんじゃな。するとお城は真つ赤なほのおに包まれ、今まさに焼け落ちようとしておった。最期をさった父、輝家がお城に火を放ち、自害して果てたんじゃろうなあ。

「父上つ、母上つ。」

じょうら姫はその場に泣きくずれ、しばらく身動き一つできんじゃった。供の者たちもあまりの無念さにしばし立ちすくんでおった。

いく時が過ぎたであろうか。ふと気づくと遠くに馬のひづめの音が……。なんと追手はもうそこ  
にまでせまつておるではないか。

「しまった。」

一行はあわてて先を急ごうとしたが、時すでにおそく、じょうら姫に残された道は死か、それとも

とらわれの身か、二つに一つじゃった。女の足ではとつていにげ切れるものではない。そうさとつた  
じょうら姫は覚悟を決め、西ノ川の淵にその可憐な身をおどらせたんじゃ。

「姫さまあ」

お供の者の声は悲しく、そして細く水面に広がった。西ノ川の淵は深く深くじょうら姫をのみこん  
でしまったんじゃ。実にかわいそうなことをしたもんじゃ。そんなことがあってから、村んもんはそ  
ん淵を「じょうら淵」と呼び、姫様の無念を悲しんだそうじゃ。

さて、この戦いは、とても激しく、山を血で真つ赤にそめたそうじゃ。「一の渡」から城に上がる  
と中に「赤柴谷」といわれる所がある。この谷に生える柴  
の木は、戦で流した血がにじんでき、切っても切っても赤  
い芽が出るので「赤柴谷」とよばれるようになったそうな。

また、山田山（茶臼山）への中、曲がりくねった細い  
道のわきに五輪塔の墓があったそうじゃ。

ここで山田の本城（八ツ田城）からにげた兵士たちが血  
だるまになって、残念、無念と息絶えた場所で、後にそこ  
には無念堂というお堂が建てられ、付近の人が供養してい  
たそうな。不思議なことにその辺りでは、どこからともな  
く「無念、無念…」という声が聞こえてくるということじ  
や。後にこの戦いを記録した人は「アハレナルコト」と表現



しておるが、それほど多くの人<sup>もの</sup>が死に、多くの悲しみを残したまさに「<sup>あわ</sup>哀れな」物語<sup>ものがたり</sup>じゃなあ。

(注) 山田城は八ツ田と中尾城で、中尾城は櫛狩屋の山田山(茶臼山)にある要害の地である。

(亀田清美)



山田山(茶臼山)